

読書への誘い

＜第19号＞ 図書室・進路指導室

10月も中旬となりました。「天高く馬肥ゆる秋」とは昔から言い習わされてきた言葉ですが、確かにいろんなものが美味しい季節ですね。秋の味覚は、秋刀魚、松茸、栗、梨、葡萄…さて、休日は誰を招いて、腕をふるいましょうか？

発車

吉原 幸子

こわれた目覚まし時計のように
もう ながいこと
わたしのなかで
発車のベルが なりやまない
柱の傍らに化石して ボタンを押す
不きげんな車掌は わたし
うすぐらい座席の隅に目をつぶって待つ
不きげんな乗客も わたしだ
発とう 青い海辺へ
囚われないひとりの空へ
屋根々々の タぐれの
このまといつく風景を 捨てて
発とう
ただ あのベルがなりやんだら――
〔吉原幸子全詩集Ⅱ〕1961 年刊

『新解さんの謎』(赤瀬川原平著・文春文庫・1999年刊)

辞書の中から立ち現れた謎の男。魚が好きで苦労人、女に厳しく、金はない——。「新解さん」とは、はたして何者か？ 三省堂「新明解国語辞典」の不思議な世界に踏み込んで、抱腹絶倒。でもちょっと真面目な言葉のジャングル探検記。

SM君から電話があった。…女性である。仕事の合間に路上観察をしている。「いまよろしいですか」もう夜の十一時だったが、S君なら知っている。よろしいだろう。「よろしいですよ」「わたしはいま、しんめいかいに来てるんです」「え？」こんな夜中に路上観察ではないと思うが、何か様子からして物件を見つけたらしい。「どこにいるって？」「しんめいかいです。じしょの」新明解国語辞典というのは知っている。昔私は学生のころ明解国語辞典というのを使っていて、上京してぼろぼろになり、もう大人になったんだからと岩波国語辞典を買ったのだった。でもそれは聞き間違いで、しんめいかいという横浜の中華街のようなそんな特殊な街ではないのだろうか。「なに、あの三省堂の辞書の？」「そうなんです。その一三七九ページ中段に来てるんです。【恋愛】のところですが」これはちょっと危ない。夜の十一時である。電話で、いきなり辞書の「恋愛」である。これが見知らぬ女性だったら私は即座に電話を切る。最近の見知らぬ女性は恐ろしい。でもこのS君は友人

2001/10

の娘さんで、路上観察学者である。女性では珍しい。好奇心旺盛なだけでなく、ちゃんと頭脳明解な人だ。明解か。

私もその新明解国語辞典を持ち出してきた。私は前述の「大人の」辞書を使っているのだけど、当該の辞書は娘が持っている。娘はアルバイトの疲れで口を開けて寝ていた。そっとドアを閉める。なにに、一三七九ページ、中段、なるほど。(中略)

SM報告はその後^{けけん}も続いた。…私はSM君から三省堂の新明解国語辞典の中に誘い込まれた。何で辞書の中に？ と怪訝に思っ^{けけん}てついて行くと、それが単なる辞書ではなく深い密林のようなところで、あれよあれよと読むうちに出られなくなり、危うく遭難しそうになった。…

とにかく日本語を明解にしようというパワーにあふれている。ふつう辞書というのは説明をムダなく最小限に抑えている。その方がミスも少なく、辞書的な正しさを保守しやすい。ところがこの新明解国語辞典はムダなく最小限なんてケチなことをせずに、どんどん説明してくれる。ミスを恐れるなんてビクついたところがあるうことか、いくらでも説明サービスをしてくれるのだ。日本語をわからせようという新解パワーである。

どくしょ【読書】一する 〔研究調査や興味本位ではなく〕教養のために書物を読むこと。〔寝転がって読んだり、雑誌・週刊誌を読むことは、本来の読書には含まれない〕

これが一・二・三版で、四版では次のように。

どくしょ【読書】一する 〔研究調査や受験勉強の時などと違って〕想(ソウ)を思いきり浮世(フセイ)の外に馳(ハ)せ精神を未知の世界に遊ばせたり、人生観を確固不動のものたらしめたりするために、時間の束縛を受けること無く本を読むこと。〔寝転がって漫画本を見たり電車の中で週刊誌を読んだりすることは、勝義の読書には含まれない〕

勝義なんて誤植じゃないかと思ったが、

しょうぎ【勝義】〔転義やひゆ的用法ではなく〕その言葉の持つ、本質的な意味・用法。

というわけで、ちょっと私^{すこ}の方に学がなかった。^{*}しかし「読書」はさすがに凄い。さっきの「世の中」も凄かったが、読書となると何だか自分の宗教の教義について書き記すような、一字一句ないがしろにはできないというような、負けてなるものかというような、千秋楽、もう絶対に星は落とせないぞというような^{ばんじやく}、盤石の構えというか、正攻法のきわみというか。

寝転がってはいけないし、漫画本はいけない。電車の中もいけないし、週刊誌もいけない。いやいけないわけじゃないが、それらは読書とはいわない。とにかくこれだけは譲れないというような新解さんの迫力というか、何か力みさえ感じられた。読書・本の世界というのは、新解さんにとっての聖域であることはたしかだろう。(pp.10-120)

※新明解国語辞典には、「世の中」は次のように説明されている。

＜同時代に属する広域を、複雑な人間関係が織り成すものととらえた語。愛し合う人と憎み合う人、成功者と失意・不遇の人とが構造上同居し、常に矛盾に満ちながら、一方には持ちつ持たれつの関係にある世間＞

